耳介前部に腫脹をきたした猫ひっかき病の1例

樋田謙二郎・亀山嘉光・中島 健・山田長敬

A case of cat scratch disease appeared with the swelling at the preauricular region

Kenjiro HIDA・Yoshimitsu KAMEYAMA・Takeshi NAKASHIMA・Nagayoshi YAMADA

Key words: cat scratch disease (猫ひっかき病), lymphadenitis (リンパ節炎), Parinaud's oculoglandular syndrome (パリノー眼リンパ節症候群)

緒 言

猫ひっかき病 (Cat scratch disease: CSD) は、猫から人に伝播される人畜共通伝染病で、リンパ節腫脹、全身倦怠、発熱を主症状とするまれな疾患である。今回、15歳、女性の右側耳介前部に腫脹をきたし、種々の検査所見より猫ひっかき病と診断した症例を経験したのでその概要を報告する。

症 例

患 者 15歳 女性。

初 診：平成2年11月■日。

主 訴：右側耳介前部の腫脹。

現病歴：平成2年10月中旬、38.5°C 前後の発熱とともに、右側耳介前部に有痛性の腫脹を自覚した。近医の内科、外科を受診したが、原因不明で、歯性病巣感染を疑われ、精査のため当科を紹介され来院した。

既往歴・家族歴：特記事項なし。

現 症

全身所見：特記事項はない。

局所所見：右側耳介前部に約3×3cm、弾性硬で、周囲組織との癒着を伴う腫脹を触知した。同部の皮膚は軽度には発赤し、圧痛が認められたが、自発痛はなかった。さらに同側の後頸下部では拇頭大、可動性の腫脹を1個触知した(写真1)。

口腔内所見：特に異常は認められなかった。

X線所見：オルソパントモグラフ、耳下腺造影撮影において特に異常はなかった。

CT 所見：右側耳下腺浅葉上に境界明瞭で、内部den-

写真1 顔貌写真

sity の不均一な1個の mass を認めた。

超音波検査所見：右側頬骨弓上に境界明瞭でφ2.8cm 球形、内部エコーが一部不均一で、底部エコーが不明瞭な像を認めた。

臨床検査所見：白血球数 7,300/mm³、リンパ球の軽度増多(41%)、赤沈の中等度亢進(33mm/h)、A/G比の低下(1.24)以外に異常は認められなかった。血清免疫学的検査では Paul-Bunnell 反応224倍、トキシプラズマ抗体価(PHA)160倍以下で、2週後に行ったいずれの検査でも同値を示した。

臨床診断：リンパ節炎の疑い。

処置および経過：外来にてノルフロキサシン(NFLX)1.5g/日を10日間投与したが、腫脹の縮小はみられず、腫脹の中央部に波動を触知するようになった。試験穿刺

九州歯科大学口腔外科学第一講座
(主任：山田長敬教授)

First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Kyushu Dental College (Chief: Prof. Nagayoshi Yamada)

受付日：平成3年7月12日

写真 2 病理組織像 (H-E 染色, $\times 100$)

類上皮細胞が柵状に配列し、その内側では炎症性細胞の浸潤が認められる。

を行い、1.5 ml の黄白色の粘稠な液体が吸引でき、細菌検査の結果、グラム陰性桿菌(2+)が検出された。11月■日、原因不明のため、再度の間診で、患者は7月下旬より子猫を飼育し、顔面に搔傷の既往があり、さらに8月中旬頃には両眼瞼結膜に発赤、湿疹が出現したが自然治癒したことが判明した。同日より抗菌剤をミノサイクリン(MINO) 200 mg/日に変更したところ、後顎下部の腫瘍は11月■日には消失した。しかし耳介前部の腫脹に変化はなく、全麻下にて切開排膿術を施行した。摘出物は約8 ml の粘稠な黄白色の液体と肉芽様物質で、同部にドレーンを留置し、創を閉鎖した。術後ドレーンよりの排膿が停止せず、12月■日、抗菌剤をロメフロキサシン(LFLX) 400 mg/日に変更し、併せて創内を同剤の生食水溶解液にて洗浄を行ったところ、1週後には排膿が停止した。術後の経過は良好で、10か月後の現在、再発は認められない。

病理組織学的所見：肉芽様組織の中心部に類上皮細胞が柵状に配列し、その内側では多数の好中球、リンパ球、形質細胞など炎症性細胞浸潤が認められた(写真2)。

皮内テスト：CSD に特異的な皮内テスト(Hanger-Rose test)を施行し、48時間の判定で5倍液に対し、8×8 mm の硬結と周囲に31×27 mm の発赤が確認され、陽性と判定した。

確定診断：猫ひっかき病。

考 察

CSD は猫から人に伝播され、一側性の頸部、腋窩部、鼠蹊部の領域リンパ節病変を特徴とする良性伝染病疾患である。口腔外科領域からの報告はまれで、現在までわずか8例にすぎない。これは発熱を伴ったリンパ節腫大が主症状のため、外科、内科、皮膚科などに受診する機会が多いためである。

本症は猫との接触が起点となることが多い。受傷後、

所属リンパ節腫脹が起こるまでの期間は一般に10～20日といわれているが¹⁾、自験例ではリンパ節腫脹が眼瞼症状が出現して1か月半以上の長期を経過した。リンパ節腫脹は多くの例で単発性に認められる。口腔外科領域ではオトガイ下、顎下部が圧倒的に多く、自験例のように耳介前部に発現することはきわめてまれである。CSD の特異例として眼瞼に病原体が播種された場合、眼瞼結膜に患部状病変をきたし、耳介前部のリンパ節腫脹を惹起するパリノー眼リンパ節症候群(Parinaud's oculoglandular syndrome)を合併することがある²⁾。自験例では問診の結果、同症候群と考えられる症状を耳介前部リンパ節腫脹の1か月半以前に自覚し、これが本症診断の1つの要因となった。

リンパ節は病期に応じて異なった病理組織像を呈し、Naji³⁾によって、Early lesion, Intermediate lesion, Late lesion の3期に分類されている。自験例ではLate lesion に相当するものと考えられる。

CSDを知るための皮内テストとしてHanger-Rose test が知られている⁴⁾。患者における陽性率は55～100%と高く、この皮内テストは診断上重要である。自験例では本テストを実施する機会を得て、陽性の反応を得た。

本症の診断に際し、他疾患との鑑別が重要である。Warwick⁴⁾は一定の診断基準を提示している。それは、①猫との接触の既往があり、搔傷または皮膚、眼の病変が認められる、②CSD 皮内テストの陽性反応、③他の原因によるリンパ節腫脹病変に対する検査の陰性反応、④摘出リンパ節の特有な病理組織所見などである。自験例ではこの診断基準に合致しており、CSD と診断した。

結 語

著者らは15歳、女性の耳介前部に発現したパリノー眼リンパ節症候群を合併したと考えられる猫ひっかき病の1例を経験したので、文献的考察を加え報告した。

引 用 文 献

- 1) 遠城寺宗徳：Cat scratch disease (猫ひっかき病)。現代小児科学大系 補遺Ⅱ。中山書店、東京、1971、284-290頁。
- 2) Carithers, H.A.: Oculoglandular disease of Parinaud. A manifestation of cat-scratch disease. Am J Dis Child 132: 1195-1200 1978.
- 3) Naji, A.F., Carbonell, F., et al.: Cat Scratch disease, a report of three new cases, Review of the literature and classification of the pathologic changes in the lymphonodes during various stages of the disease. Am J Clin Pathol 38: 513-521 1962.
- 4) Warwick, W.J.: The cat-scratch syndrome, Many disease or one disease?. Progr Med Virol 8: 256-301 1967.